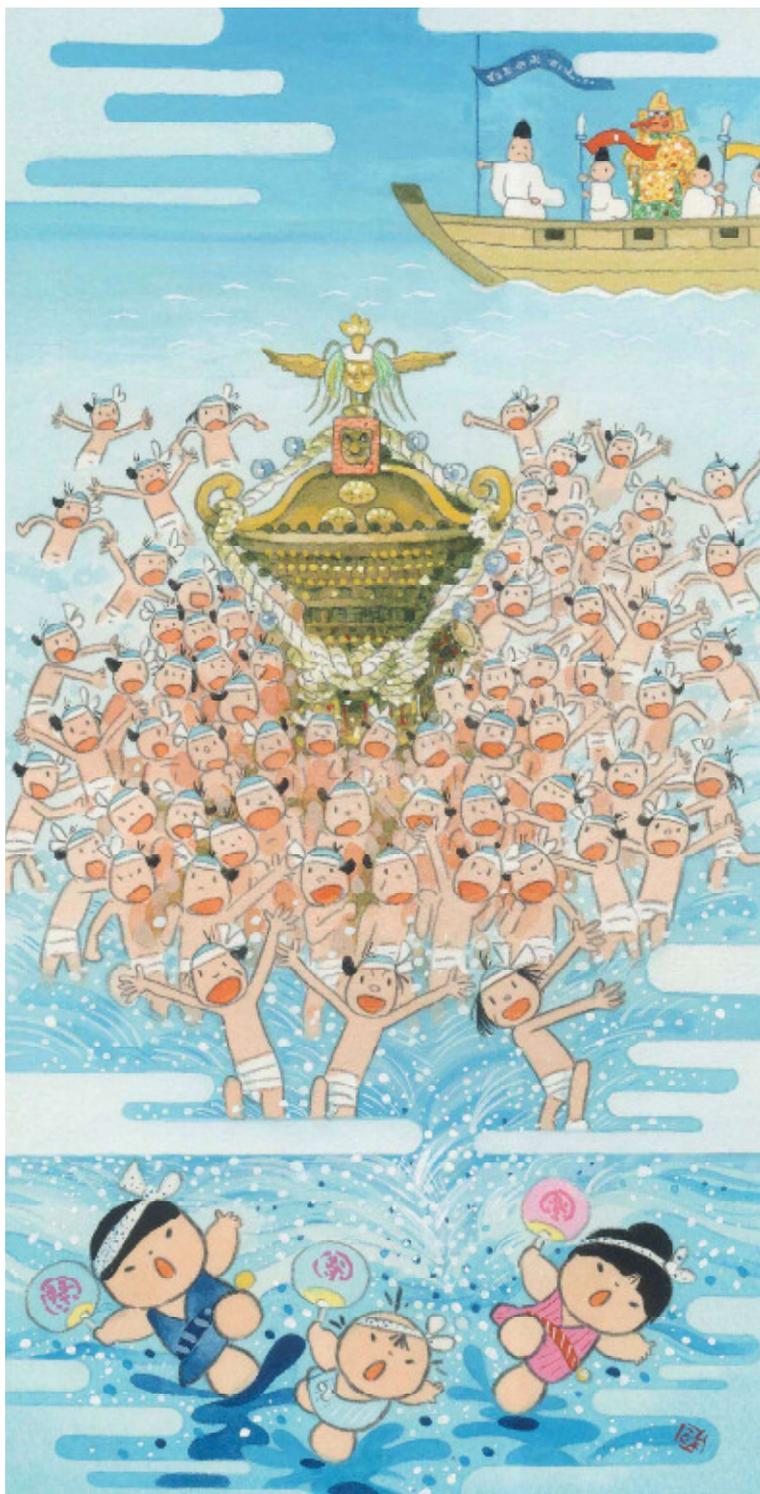


「広報しながわ」平成20（2008）年5月1日号より転載  
（イラスト：池原昭治）



# むかし 北品川 品川昔ばなし

荏原神社の天王祭（かっぱ祭り）

昔は六月六・七・八日の三日間で荏原神社（北品川二丁目）の天王祭が行われていました。最後の日はお神輿が海に入り、かっぱ祭りとも呼ばれました。荏原神社から海晏寺門前（南品川三丁目）までかついでいったお神輿は、海に入り狛師町の洲崎（現在の東品川一丁目）の海岸で陸にあがりました。大正時代以降、品川の海岸線は埋め立てが進み、お神輿が海に入るところがかわっていきました。

この海を渡るお神輿の屋根につけられている御神面には、こんな話が伝わっています。

江戸時代前半、番匠面（現在の埼玉県三郷市）の村人が舟で洲崎付近を通っていると、波の上にゆらゆら漂う光るものを見つけました。「おや、なんだろう?」。不思議に思いながら、急いで舟で近づき、海の中から光るものを拾い上げてみると、それは、牛頭天王（須佐之男命）によく似た金色のお面でした。村人は「これはなんともきれいな金びかなお面だ、ありがたいものかもしれない」といって、狛師町の人たちと相談して貫布祓社（現在の荏原神社）に納めました。

ある夜、貫布祓社の神主の夢に神様があらわれて、「あの金色の面は、海から拾われたものだから、一年に一度は海中を渡らせるように」と告げると、消えました。目が覚めた神主は、「神のお告げにちがいない」と思い、品川の漁師たちを集めて、お神輿の屋根にお面をつけて、威勢のいいお囃子にあわせて「天王様だ！お神輿だ！ワッショイ！ワッショイ！もーめ！もーめ！」と海の中をかつぎました。するとどうでしょう。その年は、水の事故もほとんどなく、海苔をはじめ、魚や貝が大漁だったのです。

このことがあってから、毎年、豊漁と豊作を祈って、お神輿が海中を渡るようになりました。お面の牛頭天王は水の神様で、カッパが牛頭天王のお使いだったことや、水からあがったかつぎ手の姿がカッパのように見えたことなどから、いつのころからかこのお祭りは「かっぱ祭り」と呼ばれるようになりました。そして、お面が拾われたところは「天王洲」と名づけられました。

今でも、お祭りの始まる前には、番匠面に行き稲の若穂をいただいてお神輿の鳳凰にくわえさせるという「稲穂取り」の行事が続いています。

今年の荏原神社の天王祭は、五月三十日（金）～六月一日（日）に行われ、最終日にお台場海浜公園で、お神輿が海中を渡御します。